第 48 回 知床五湖の利用のあり方協議会 議事次第

日時：2026 年 3 月 17 日（火）13:30～17:00

場所：知床世界遺産センター　レクチャールーム

議事：

【報告事項】

1. 2025 年度 知床五湖利用調整地区の運用結果について
2. 知床五湖登録引率者審査部会の議論結果について
3. 利用調整地区指定認定機関の会計報告について
4. 知床五湖園地高架木道の再整備について

【決議事項】

5. 2026 年度知床五湖の運用計画について

【協議事項】

6. 知床五湖園地でのヒグマ等の安全管理対策について
7. スイレンの除去計画について
8. 利用適正化計画の改定について

【その他事項】

9. 立入認定手数料町民無料キャンペーンの実施について
10. 知床五湖園地駐車場料金の改定について

配付資料：

資料１－１　2025 年度 知床五湖利用調整地区の運用結果について
資料１－２　2025 年度 ヒグマ活動期のツアー実績について
資料２　知床五湖登録引率者審査部会の議論結果
資料３　令和 7 年度 知床五湖利用調整地区 指定認定機関 認定関係事務 収支決算書
資料４　知床五湖園地高架木道の再整備について
資料５　2026 年度 知床五湖の運用計画
資料６－１　知床五湖園地でのヒグマの安全管理対策案一覧
資料６－２　ツアーの中止・継続及び地上遊歩道の閉鎖・再開の基準等について（案）
資料６－３　知床五湖地上遊歩道での環境整備について
資料６－４　レクチャー映像の改修について
資料６－５　登録引率者の研修カリキュラム改善について
資料６－６　植生保護期（夏）の巡視の試行について
資料７　2026 年度 園芸スイレンの除去計画と今後の課題
資料８　利用適正化計画の改定について
資料９　立入認定手数料町民無料キャンペーンの実施について
資料１０　知床五湖園地駐車場料金改定について

参考資料１　知床五湖の利用のあり方協議会 設置要領
参考資料２　第 47 回知床五湖の利用のあり方協議会 議事録
参考資料３　ヒグマ活動期の小ループツアー試行事業計画（第二期）
参考資料４　ヒグマ人身事故再発防止策（案）の体系

出席者：

	所属	役職	氏名
構成団体	知床斜里町観光協会	事務局長	新村　武志
	知床ガイド協議会	事務局	若月　識
	知床ガイド協議会	監事	岩山　直
	知床温泉旅館協同組合		欠席
	斜里バス		欠席
	ユートピア知床　五湖営業課	代表取締役社長	櫻井　晋吾
	ユートピア知床　五湖営業課	課長	吉田　和彦
	ウトロ自治会	会長	上野山　文男
	ウトロ地域協議会		渡邉　誠
	しれとこ・ウトロフォーラム 21		小川　佳彦
	一般財団法人　自然公園財団知床支部	副所長	向山　純平
	一般財団法人　自然公園財団知床支部		畠山　声葉
	公益財団法人　知床財団　事業部	部長	山本　幸
	公益財団法人　知床財団　事業部　保護管理係	係長	金川　晃大
	公益財団法人　知床財団　公園事業係	係長	片山　綾
事務局	環境省釧路自然環境事務所	国立公園課 課長	渡邊 雄児
	環境省釧路自然環境事務所	自然再生企画官	瀬川　涼
			（web）
	環境省釧路自然環境事務所	滞在環境整備専門官	馬庭　康太
			（web）
	環境省ウトロ自然保護官事務所	首席国立公園保護管理企画官	二神　紀彦
	環境省ウトロ自然保護官事務所	国立公園利用企画官	伊藤　薫
	環境省ウトロ自然保護官事務所	国立公園管理官	渡邊　寛明
	北海道オホーツク振興局保健部環境生活課　知床分室	主幹	三井　義也
	斜里町総務部環境課	課長	塩　幸也
	斜里町総務部環境課	係長	吉田　貴裕
運営事務局	公益財団法人　知床財団　事業部　公園事業係	主任	江口　順子
			茂木　三千郎
			原口　桜子

オブザーバー：北海道造園設計（佐藤・恩田）

議事結果：

環境省ウトロ（二神）：第 48 回知床五湖の利用のあり方協議会（以下、あり方協議会とする）を開催する。開会にあたり、釧路自然環境事務所の渡邊より挨拶申し上げる。

環境省釧路（渡邊）：ただいま紹介にあずかった釧路自然環境事務所国立公園課の渡邊である。本日はよろしくお願い申し上げる。見知った方々のお顔も多く見受けられるが、私が当地の業務に携わるのは約 3 年ぶりとなる。一度知床を離れた後、再び釧路へ戻り本会議に出席する機会を得た。本日の資料を拝見したところ、私が以前在籍していた当時に「スイレン等の状況が懸念されるためモニタリングを進めよう」と議論していた件が、現在では本格的な取り組みとして大きく進展しており、当時の構想が形になりつつあることを実感している。また、小ループの利用についても、当時は限られた枠組みの中で多様なニーズに応えるべく工夫を凝らしていた段階であったが、いよいよ本格的な運用に向けた動きが進んでおり、全体として当時から多大な進捗があったと感じた次第である。一方で、本日の議題にも含まれているが、昨年度のあり方協議会において「小ループの利用計画を変更し、枠を拡大する」旨の合意がなされたものの、ご承知の通り、その後羅臼岳でのヒグマによる人身事故が発生した。その検証プロセスにおいて「人慣れしたヒグマを減らしていく必要がある」との課題が浮上し、知床五湖の利用のあり方についても委員の先生方から様々なご意見をいただいた。これらを踏まえ、昨年度に一度合意に至った内容から一部計画等の修正を行っている。詳細については後ほど説明させていただくため、本日はこの場でしっかりと議論を重ね、方針を固めていきたいと考えている。3 時間という長丁場になるが、どうぞよろしくお願い申し上げる。

1)　2025 年度　知床五湖利用調整地区の運用結果について

資料 1-1　2025 年度　知床五湖利用調整地区の運用結果について（説明/知床財団）

資料 1-2　2025 年度　ヒグマ活動期のツアー実績について（説明/知床財団）

ガイド協議会（若月）：資料 1-1 における五湖全体の入り込み状況は、利用者の動向を把握する上で非常に重要なデータである。2 点確認事項がある。1 点目は、入り込み数が前年比 92%に減少した理由として、羅臼岳でのヒグマによる人身事故や知床五湖でのヒグマ出没が挙げられているが、これらは客観的なデータに基づく根拠があるのか、あるいは推測によるものか伺いたい。2 点目は、資料 8 ページ下部の数値についてである。これを見ると 4 月、9 月、11 月の入り込みは昨年度を下回っている一方で、5 月、6 月、7 月は前年度を上回っている。この傾向から、植生保護期の観光利用の需要が低下し、相対的にヒグマ活動期の需要が伸びている可能性も読み取れるが、この点についてどのような分析を行っているか。

知床財団（茂木）：1 点目のご質問であるが、前年比での利用者数減少の根拠については、

当財団が日々作成している日報データに基づき、閉鎖日を抽出した客観的データである。資料1ページ目に記載の通り、9月は天候不良による閉園も複数回発生しているため、すべてがヒグマに起因した閉鎖というわけではない。しかし、資料6ページ表3が示す通り、9月の閉鎖回数23回のうち、半数以上がヒグマの目撃によるものであり、ヒグマ関連の閉鎖が利用の機会を少なくさせた主因であることはデータから見て明らかである。2点目の、4月、9月、11月の来園者数が昨年度を下回った点についてであるが、これらの数値は高架木道および地上遊歩道のカウンター数値、マイカー利用者数、シャトルバス利用者数といった異なる性質のデータを合算した「推計値」であるため、利用者の細かい行動分析に用いるには限界がある。あくまでも全体的な傾向を示す参考値として提示している。

ガイド協議会（若月）：承知した。今後の動向については、しっかりと分析を行うべきであると考える。知床五湖全体の人気が低下すれば、全体の落ち込みに直結するためである。引き続き対応をお願いしたい。

知床財団（金川）：先のことについて1点申し上げる。減少の要因としては、知床全体の観光動向も影響していると考えられる。本日、知床温泉旅館協同組合は欠席されているが、同組合のデータ等も踏まえ、知床全体として観光客が減少しているのか、あるいは知床五湖において局所的に減少しているのかを含め、総合的に検証していく必要があると考える。指摘の通り、原因についてはしっかりと究明していくべきである。

ガイド協議会（若月）：先の発言について補足したい。知床五湖は最も人気があり、数値として傾向が表れやすい場所でもあるため、このデータをきちんと引き出していけるかどうかも含めて重要であると認識している。数値を示すだけではなく、しっかりと分析すべきであるというのが先ほどの質問の趣旨である。

ガイド協議会（岩山）：資料1-1および1-2について、今年度のヒグマ活動期は過去最低の遭遇数であったとのことだが、私が知床五湖で引率を開始して以来、これほど目撃が少なかった年はないと認識している。この時期の遭遇数減少について、何らかの分析は行われているか。

知床財団（金川）：5月から7月頃のヒグマの繁殖期にかけて、特に昨年は公園内全体においてヒグマの動向が落ち着いていた。具体的な根拠やデータがあるわけではないものの、おそらく前年秋のミズナラの堅果が豊作であった影響が、翌年まで持ち越されたものと推測される。すなわち、夏季の間も林内に留まり、ミズナラの堅果を採食し続ける個体が多かったために、人前に出てくることが少なかったのではないか、という推察をしている。また、こうした餌資源の状況要因が公園全体のヒグマの動向に影響したと考えている。

ウトロ地域協議会（渡邉）：資料1-1の2ページおよび6ページの数値について説明を求め

る。2 ページによれば、2025 年度植生保護期の利用者数は 9 月が 9,444 人、8 月が 19,798 人である。一方で、6 ページを見ると、同年度 9 月の閉鎖日は 23 日となっており、ほぼ 1 ヶ月間閉鎖していたように見受けられる。この「閉鎖日」とは、終日閉鎖を指すのか、あるいは途中で閉鎖したものも含むのか。開閉日数の割合で見ると、8 月が 22 日間の開放、9 月が 7 日間の開放となり、9 月は 8 月の 3 分の 1 程度しか稼働していないように見える。これに基づけば、利用者数は 2 ページに示された約 2 倍という差以上に、もっと大きな開きがあってもよいのではないかと考えるが、「閉鎖日」の具体的な定義について確認したい。

知床財団（茂木）：資料には詳細を記載していないが、「閉鎖日」には一時的な閉鎖があった日も含めている。ヒグマが出没した場合に終日閉鎖となるケースは比較的少なく、調査を含め数時間で利用を再開するため、長くても半日程度の閉鎖にとどまることが多い。

ウトロ地域協議会（渡邉）：承知した。

環境省ウトロ（二神）：他にご意見あるか。

ガイド協議会（若月）：今年度はヒグマ活動期においてヒグマの目撃が少なく、植生保護期には目撃が多いという本来とは逆の結果になっている。我々ガイドは現場にいるのである程度状況を理解しているが、会議の出席者に向けて、改めて今年度このような状況になった理由についてご説明いただきたい。

知床財団（金川）：今年度の夏の植生保護期におけるヒグマの動向について説明する。当財団ではミズナラの堅果の資源量調査を実施しており、毎年の結実の傾向を調べている。その結果から言えるのは、昨年は知床半島全体においてミズナラの結実が悪かったという状況である。ミズナラの実りが悪い年は、少ない堅果を探すためヒグマの行動圏が通常よりも広くなることに加え、局所的に実りの良い場所へヒグマが集中しやすくなる。昨年はその傾向が顕著であった。とりわけ知床五湖には、局所的にミズナラがよく実っていた場所もあった。周辺地域でいうとカムイワッカも同様の状況であり、結果としてヒグマの出没が頻発したと考えられる。

ガイド協議会（岩山）：知床五湖へ向かう道路上など知床五湖園地外では複数組のヒグマの目撃があり、それに伴って観光客の人だかりが発生する事態も見受けられた。このように、園地内と園地外で出没の傾向に違いが生じた理由について、何か考えられる要因はあるか。

知床財団（金川）：知床国立公園内の道路沿線で目撃されるヒグマは、おおむね特定の個体に限られている。人への警戒心が大きく低下し、人を気にすることなく道路沿いを歩く個体が一定数存在しているのが実情である。こうした個体は、餌の有無に関わらず人前に姿を現す傾向があり、警戒心のある大半のヒグマとは行動傾向が異なっているように思う。

ウトロ地域協議会（渡邉）：資料 1-1 の 5 ページ目を見ると、植生保護期の 9 月に関しては、2022 年以降の 4 年間、ヒグマとの遭遇数が高い水準のまま変わっていないように見受けられる。今年度の状況が異常であったのか、あるいは例年通りの遭遇数であったのかを正確に判断しなければ、今後の植生保護期における取り扱い方針にも影響が生じると考える。先ほどの説明ではミズナラの結実状況による影響とのことであったが、ここ数年の 9 月は総じて目撃数が多い状況にあり、そことの因果関係が不明確である。改めて、今年度の発生状況は特異であったと言えるのか、それとも例年通りであったのか、見解を伺いたい。

知床財団（金川）：ヒグマの出没の増減は単一の要因ではなく、複合的な要因によって決まるものであり、餌資源の豊凶のみに起因するものではない。知床五湖園地においても、先ほどの道路沿線の事例と同様に、特定の個体が頻繁に出没することによって目撃件数が急増する傾向もある。詳細な分析に至っていない部分もあるが、様々な要因が複合的に絡んでいると認識している。

ガイド協議会（若月）：植生保護期においては、ヒグマの目撃数が増加傾向にあるという認識で間違いないか。

知床財団（金川）：知床五湖園地単体で見ると、近年、ヒグマの出没件数が高い水準で高止まりしている状況にある。こうした変化の背景には、先ほど申し上げたような要因もあるだろうし、大局的に見れば気候変動なども要因として考えられるのではないか。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：今年度のヒグマ活動期はヒグマの出没が少なかったとのことだが、目撃が少ないのであれば、ヒグマ活動期であっても植生保護期と同様の利用形態とすることはできないか。本来は利用者が自由に散策できる仕組みが望ましいものの、ヒグマとの遭遇リスクを考慮してガイドの同伴を義務付けていると認識している。出没状況を踏まえ、ヒグマ活動期の期間自体を短縮するといった対応は検討できないか。

知床財団（金川）：考え方としては、知床五湖利用調整地区制度の理念に照らし、制度や利用期はヒグマの活動状況に応じて柔軟に見直されるべきである。先ほど渡邉氏から指摘があったとおり、植生保護期の出没が頻発し、モニタリング結果として高止まりの状況が続くのであれば、逆にヒグマ活動期を延長するという考え方もあり得る。逆もまた然りであり、小川氏が指摘された通り、この先ヒグマ活動期にヒグマの出没が少ない状況が中長期的に続くのであれば、制度自体を見直す必要が生じると考える。いずれにせよ、その判断材料とするためにも、引き続き継続的なモニタリングをしっかりと行うべきであると認識している。

ガイド協議会（若月）：現在の利用形態がヒグマの行動に何らかの影響を与えている可能性はあるか。我々ガイドは誇りを持って引率しており、ガイドが同行することによってヒ

グマの出没リスクが多少なりとも軽減されているという自負のもと、ツアーを実施しているところである。

知床財団（金川）：非常に難しい問題である。過去、新型コロナウイルス感染拡大以前に知床五湖でヒグマの出没が急増したケースがあったが、当時は園地内におけるヒグマの人慣れが出没増加の要因ではないかと議論された経緯がある。一方で、ガイドの遭遇回避の取り組みによってヒグマの目撃が抑えられている可能性も十分に考えられる。いずれにせよ、単一の要因のみを切り取って判断することは困難であるため、引き続き多角的なモニタリングを実施し、利用者の動向なども加味して分析を行いながら、ヒグマの動向に注視していく必要がある。

環境省ウトロ（渡邊）：知床五湖においては長期モニタリング計画に基づき、継続的なモニタリングと概ね5年ごとの評価を行い、その結果を利用適正化計画に反映させている。先ほど金川氏から指摘があった通り、長期的な視点で傾向を分析し、計画へ落とし込んでいく仕組みである。今後も本協議会のような場で議論を重ね、利用適正化計画に反映していく流れとなるため、引き続きご意見をお願いしたい。

環境省釧路（渡邊）：2022年以降の4年間、9月においてヒグマの出没が多く発生している件について確認したい。これらは特定の個体によるものか、あるいは別個体によるものか、データ等から判明していることはあるか。

知床財団（金川）：知床財団がヒグマの出没対応を行う際は、出没個体を撮影し、個体識別を行っている。過去にも確認されている特定の個体と判明することもあれば、識別できない個体の場合もある。また、目撃情報の多くは観光客等から寄せられるため、正確な個体識別や判断が難しいケースがほとんどである。そのため、知床五湖で活動するヒグマの一部については毎年出没している特定の個体であることを把握できているが、詳細が分かっていない多くの個体も混在しているのが実情である。

環境省釧路（渡邊）：承知した。

2)　知床五湖登録引率者審査部会の議論結果について

資料２　知床五湖登録引率者審査部会の議論結果（説明/斜里町）

ガイド協議会（若月）：前回の審査部会でも要望を出したが、安全管理上の理由で利用時間を短縮する件については、意見が分かれ難航した経緯がある。過去のあり方協議会や審査部会での議論を経て、当初は朝7時半から18時半までであった利用時間が、諸事情により短縮されてきた。今回、ヒグマ活動期の大ループにおいて、安全対策として最終レクチャーを15時に繰り上げるのであれば、日没等の安全対策とは無関係な朝8時より前の時間帯の活用について、再度検討の議題に上げてはどうかと提案している。管理

者側が安全管理を理由とするのであれば、我々ガイド側としても、これまで妥協してきた「7 時 50 分に知床五湖園地の開園と五湖フィールドハウスの開館をしてほしい」という要望を改めて提示したい。本件が協議事項に明記されていないため、改めて協議事項に追加していただくようお願いする。

環境省ウトロ（二神）：承知した。本件については協議事項に追加する。

環境省（渡邊）：資料 2 の補足として、参考資料 3 について説明する。これは、第 43 回および第 44 回審査部会で決定した小ループの試行事業計画である。本事業計画は、来年度から 3 か年を期間とする暫定的な計画となる。1 ページ目に記載の通り、基本方針として「ヒグマ活動期の安定的利用」を掲げている。ヒグマとの遭遇が全体的に増加している中で、安定的に利用していただくこと、ならびに多様なニーズに対応していくことを目指し、検証を続けながら事業を進めていく方針である。この小ループ試行事業計画の対象やコンセプト、具体的にどのような多様なニーズを捉えていくのかといった点については、まだ十分な議論ができていない。そのため、これらの課題を含めて、今回の 3 か年で検証していくこととなる。大まかな説明となるが、このような事業計画に沿って進めていく。本計画は、管理者の環境省・北海道・斜里町、知床五湖登録引率者代表、および指定認定機関である知床財団の三者で作成し、審査部会の中で議論をして合意形成を図っていく流れとなる。

ガイド協議会（岩山）：安全対策による 15 時台のツアー3 枠を削減する件について、我々としては承服しかねる部分もあるが、管理者の意向を尊重し、受け入れることとした。それに対する代替枠として、13 時台の空き枠の活用および朝 8 時 00 分への大ループツアー枠新設の要望を出している。しかし、その提案内容が記載されていなかったため、検討事項にしっかりと明記していただきたい。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：大ループの 15 時台の枠を削減するからといって、早朝にツアーの利用枠を追加してほしいという考え方には疑問を感じる。ガイドとして事業を営む上でそのような事情があることは理解できるが、午後の時間が短縮されるからといって、代わりに朝の時間を早めてほしいという論理は成り立たないのではないか。

ガイド協議会（若月）：ヒグマ活動期だけでなく、植生保護期においてもレクチャー時間を削減する案が今回出ている。全体の利用バランスや、朝に渋滞が発生しやすいという現状を踏まえ、利用のニーズをしっかりと捉えた上で時間設定をするべきではないかと、我々ガイドは提案しているのである。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：安全が確保でき、安全上問題がない、つまり全く事故が起きないのであれば、開園開館の時間をきちんと考慮して実施すべきだと考える。しかし、もし安全上の問題があるのであれば、それはやむを得ないことである。

ガイド協議会（岩山）：今回、日没の関係による安全対策として、15 時台の枠「15 時 10 分、20 分、30 分」が削減されることとなっている。そのようであれば、安全対策上問題のない朝 8 時などの枠を新たに追加してもよいのではないか、というのが我々の提案である。早朝の利用に関しては、特段の安全上の問題はないと認識している。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：安全面や駐車場の管理といった課題もあるため、それが関係者間で支障なく運用できるのであれば、よいのではないかと考える。

ガイド協議会（岩山）：今回、日没に伴う安全対策を理由として、15 時台の 3 枠「15 時 10 分、20 分、30 分」を削減する方針が示されているが、この点について小川氏のお考えをお聞きしたい。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：日没を理由とした時間短縮についてであるが、単に日が沈んで暗くなることだけが理由ではないはずだ。他にも安全管理上など、何らかの理由があっての判断ではないか。

ガイド協議会（岩山）：その点については、管理者側に確認していただきたい。我々としては、前回の会議においても安全対策上の問題はないと主張している。それゆえに、今回の枠削減という決定には納得していない状況である。妥協案として、夕方削るのであれば、早朝に利用枠を設けることは問題ないのではないかと考える。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：早朝の開園時間を早める対応については、開園および開館業務を担う運営側の人員体制次第ではないかと考える。

環境省ウトロ（渡邊）：先ほどの議論について、本来は資料 5 の議題にて扱う予定であったが、この場で環境省としての見解を申し上げる。環境省としては、羅臼岳でのヒグマによる人身事故の発生や、近年のヒグマ遭遇件数の増加、およびヒグマの人慣れに対する懸念が生じている現状を踏まえ、安全管理上の対策を確実に行っていきたいと考えている。そのような背景から、今年度のヒグマ活動期や植生保護期における大ループの利用に関しては、日没時間から逆算し、傷病者が発生した際の救出に要する時間を考慮した結果、現在のレクチャー時間では時間的猶予がないと判断した。そのため、万が一に備えて日没 30 分前に余裕をもって対応できるよう午後の利用枠を短縮する決定に至った次第である。一方で、代替案として出ている「開園時間を早める」という提案に関しても、安全管理上の対策が十分に講じられ、地域の方々等関係者の合意が得られるのであれば、環境省として実施を容認する姿勢である。しかしながら現状の課題として、先ほど指摘があった人員体制の問題、これは開園・開館時間を 15 分早めることに伴う全スタッフの出勤時間繰り上げ等や、それに伴う関係機関との協議、さらには予算確保の難しさなどがある。そのため、「午後の利用時間を短縮する代わりに、朝の開園時間を早める」といった即時かつ同時の対応は困難であるため、どうかご理解いただきたい。

ガイド協議会（岩山）：以前、渡邊氏から安全対策上の理由について説明があった際「人慣

れしたヒグマ」に関する言及はなかったと記憶している。その時はあくまで、「万が一の事態が発生した際、対応中に日没を迎えてしまうリスクがあるため、安全対策として午後の利用枠を削減する」という説明であったはずである。

環境省ウトロ（渡邊）：午後の利用枠削減の件については、ヒグマの人慣れは直接的な理由ではない。先ほどの言及は、あくまで全体的なヒグマの安全管理を強化していく中で、近年顕在化している課題の一つとして「ヒグマの人慣れ」を例に挙げた次第である。

環境省ウトロ（二神）：運用計画については、資料5の決議事項の議題として取り上げるため、その際にご発言いただきたい。それでは次の議事に進む。

3) 利用調整地区指定認定機関の会計報告について

資料3 令和7年度 知床国立公園知床五湖利用調整地区 指定認定機関 認定関係事務 収支決算書（案）（説明/知床財団）

ユートピア知床（櫻井）：この収支は、知床財団全体の収支か。

知床財団（江口）：知床財団全体の収支ではなく、指定認定機関としての認定事務に関する収支である。

4) 知床五湖園地高架木道の再整備について

資料4 知床五湖園地高架木道の再整備について（説明/北海道造園設計）

ガイド協議会（若月）：以前の審査部会でも申し上げた通り、我々ガイドは知床五湖厳冬期ツアーにおいて湖畔展望台の脇を通行ルートとして活用している。5ページ目の計画平面図を見ると、地上遊歩道入り口が右側へ突出しており、積雪時にはこの動線が完全に塞がれてしまう恐れがある。現状でも動線は非常に狭く、今の位置が限界であるため、現行の範囲内に収めるか、あるいは左側へ拡張するよう検討いただきたい。

自然公園財団（向山）：5 ページ目の湖畔展望台からの逆走防止対策において提示された 4 案について、日々の巡視や遊歩道整備の実務を担う立場から意見を述べたい。案3の腰高の扉や、案4の脱着式の仕切りについては、利用者の乗り越えに対する懸念や、経年劣化・除雪時の不具合といった維持管理上の課題が拭えない。また、踊り場付近に扉を設ける案2についても、有事の際の滞留リスクや避難誘導の遅れなどが考えられる。見栄えの面で課題はあるものの、地上遊歩道と高架木道を物理的に切り分けられるという点でいうと、現行通りの回転扉があった位置に大きな扉を設置する案1が望ましい。

知床財団（片山）：向山氏が推奨する案1の有効性は理解できるが、高架木道は非常に風が強い場所であるため、大型の扉が構造的に耐えうるかどうかが懸念される。現実的な落とし所としては、腰高の扉である案3が妥当ではないか。また、案4のような脱着式の

仕切りは破損のリスクが高いと見ており、今後さらに他者の意見も募りながら、多角的な検討を深めていくべきである。

ガイド協議会（若月）：高架木道における風対策は非常に重要である。その上で、先ほどの向山氏の提案にある「物理的な遮断」という目的を両立させる手段として、頑丈な格子状の扉を採用してはどうか。格子状であれば風圧を逃がしつつ、視覚的な目隠し機能を果たせるため、双方の懸念をカバーできるのではないか。

自然公園財団（向山）：高架木道から地上遊歩道へ降りるための管理用扉の設置個所について現案の海側ではなく、反対の 1 湖側への変更を提案する。理由は、現案の海側はササの繁茂が著しく、継続的な刈り取り作業の負担が発生するためである。対して 1 湖側にはすでに電気柵のメンテナンスや清掃で活用している通路があるため、既存の動線を有効活用でき、ササ刈りなどの管理コストの抑制と運用の効率化が見込める。

北海道造園設計（佐藤）：承知した。扉の位置については、案 1 を軸に据え、懸念されている風の影響を最小限に抑えるため、風通しの良い格子状の構造で検討を進めていく。また、管理者用の出入り口についても、現場の維持管理の効率性を重視し、展望台側に配置するよう設計を変更する。これらはあくまで基本設計の段階であるため、今後も詳細を詰める過程で、随時皆様に中間報告を行いながら進めていきたいと考えている。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：再生木材とアルミ材の併用により、現行の木造よりも耐久性が大幅に向上するとのことだが、両素材の具体的な機能の違いについて伺いたい。耐用年数はともに 30 年以上と示されているが、耐荷重や使用場所の制限など、構造上の役割としてどのような使い分けを想定しているのか。

北海道造園設計（佐藤）：素材の役割分担について説明する。アルミ材は全体の強度を支える「構造材」であり、一方で再生木材は強度が低く重みに耐えられないため、あくまで表面を整える「化粧材」として位置づけている。具体的には、アルミで骨組みを構築した上で、利用者の手や足が直接触れる箇所に仕上げ材として再生木材を配置する設計である。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：現状の設計案では、手すり下部にあるアルミ製の格子部分が露出しており、いかにも金属的な印象を与える。景観への配慮という観点から、この部分も全て再生木材で覆うか、あるいはアルミ部分の形状や色調を、周囲の自然環境により調和するものへと改善すべきではないか。単なる既製品のような外観は避け、専門家の知見も交えながら、知床の風景に最も合致する意匠を追求していただきたい。

北海道造園設計（佐藤）：アルミ格子の部分についても、再生木材を貼付して質感を統一することは可能である。景観への配慮については意見として承る。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：加えて、将来的な冬期の高架木道利用も視野に入れた設計を求めたい。具体的には、除雪機による作業のしやすさや、積雪・凍結時でも滑りにくい路面仕様など、冬の厳しい条件下での実用性を考慮すべきである。流氷の減少等に伴い冬の観光形態も変化していくことが予想されるため、通年利用を前提とした構造を検討してほしい。

環境省ウトロ（渡邊）：現状の再生木材は除雪機の負荷に直接耐えうる仕様となっているか定かではないが、冬季に保護用のシートを設置するなどの後付け的な対応を含め、検討の余地はあると考えている。今後は冬期の五湖利用という広域的な戦略も見据えつつ、新木道の具体的な活用方法について多角的に協議を進めていきたい。

5)　2026 年度 知床五湖の運用計画

資料 5　2026 年度 知床五湖の運用計画（説明/環境省）

ガイド協議会（若月）：植生保護期まで開園時間を短縮することによる利用者の利便性低下を強く懸念している。日没に合わせるにしても、30 分刻みという大まかな設定ではなく、10 分、20 分単位で精査すれば、より長く利用枠を残せるはずである。我々ガイドは、お客様に質の高いサービスを提供し、それに見合う対価を得ることで健全な運営を目指すべきだと考えている。安易な効率化は利便性の低下を招き、結果として利用者が離れる「負のスパイラル」に陥るリスクがある。民間の感覚からすれば、どこかで踏ん張る努力が必要ではないか。

環境省ウトロ（渡邊）：安全管理の責任を負う管理者としての立場から、大ループの最終レクチャー時間を 30 分短縮することは譲れないラインである。一方で、利用ニーズの把握や効率化が重要であるという認識は共通している。来年度策定予定の「知床エコツーリズム推進戦略」と並行して、知床全体の利用のあり方を再定義し、その全体方針に基づいた最適な時間配分を検討していきたい。

ガイド協議会（岩山）：前回の審査部会でも議論したが、安全上の理由で後ろの最終レクチャー時間を「削る」のであれば、その代替として他の時間帯に枠を付け加えるべきである。安全管理上問題がなければ、開園時間を早めるなどの柔軟な対応が必要だ。具体的には、朝 8 時台や、現在空きがある 13 時台に新たな枠を設けることで、削られた分の枠を補填することを提案したい。

ガイド協議会（若月）：現場でのお客様の動きを敏感に察知している立場から言わせてもらえば、お盆などの混雑期には朝から渋滞が発生しているにもかかわらず、既存のレクチャー枠が十分に機能していない現実がある。8 時 10 分の枠があるのに待機客をスムーズに誘導できていない現状は、顧客満足度の観点からも改善すべき課題である。

ガイド協議会（岩山）：そもそもこの利用調整地区制度は、混雑解消と利用の分散化を目的

に立ち上げたはずである。それなのに運用時間を縮小し、特定の時間に利用者を集中させてしまうのは、制度の原点に逆行するものであり、かえって安全上のリスクを高めかねない。制度設立時の理念に立ち返り、混雑を助長しないための慎重な検討を求める。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：閉園時間が早まる件について、利用できるに越したことはないが、管理者が安全上のリスクや恐怖を感じるというのであれば、それに勝る理屈はない。安全こそが最優先事項であり、そこに異論はない。また、後ろの時間を削った代わりに朝を早く開園・開館という「代替」の考え方には違和感がある。もし早朝開園を望むのであれば、それは代替案としてではなく、改めて関係各所に「開けてもらえないか」とお願いするのが筋ではないか。そもそもこの制度は、ヒグマ出没による閉鎖で利用できない日々が続いた状況を打破し、ガイド付きでなんとか利用できるようにと始まったものである。自由勝手に入って混雑させるのではなく、秩序を持って安全に散策できるように時間枠も決めたはずだ。利用者の利便性ばかりを盾にするのは、制度の根本を履き違えているのではないか。現にヒグマ活動期には高いガイド料を支払っているが、それも安全を確保するための「仕方のないコスト」として受け入れられているはずである。

ガイド協議会（岩山）：安全管理上の措置として時間を削るのがやむを得ないことは理解している。しかし、削られた分の「時間の枠」を他の時間帯で補填するような、代替案の検討すらなされないのか。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：それは何の代替なのか。午後の枠削減によって失われる「ガイドの営業機会」の代替を求めているだけではないのか。そんな理屈を通せば、際限なく開園時間を広げなければならなくなる。観光客の代弁をしているような言い方だが、私にはそうは聞こえない。

ガイド協議会（岩山）：この制度を立ち上げた際に、関係者で話し合って作り上げた「枠」というものがある。公に決めたルールや枠組みを守り、維持していくことも、組織として必要ではないか。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：もともとの経緯を言えば、ヒグマが出れば即閉鎖され、全く利用できなかった時期が長かった。その絶望的な状況から考えれば、今の制度によって観光利用ができていること自体、格段に前進している。この制度があるからこそ利用できているという原点を忘れてはならない。

ガイド協議会（岩山）：我々が対話を重ねて、合意の上で作り上げてきた運用枠があるのだから、それを尊重すべきだ。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：その考え方は、制度の本質とは違うのではないか。

自然公園財団（向山）：昨今の事故やヒグマの出没、あるいは傷病者対応など、これまでは

円滑に進んでいた運用が、知床の現状を鑑みれば一筋縄ではいかない局面も増えている。今回のヒグマ活動期における大ループレクチャー時間の時間短縮については、管理者が安全確保を最優先に考え、下した判断であると受け止めている。一方で、五湖園地の開園時間自体に変更はない。ツアーが終了した後も、高架木道については引き続き安全に利用いただけるため、我々が玄関口としてその素晴らしい景観の魅力を発信し続けていく。駐車場の渋滞や早朝の混雑対策についても、引き続き我々が現場で責任を持って対応にあたりたい。

ガイド協議会（岩山）：安全対策の観点から、8 時 10 分のレクチャー枠に対して 7 時 50 分に開園するという運用は、共通認識として承知されているのか。

自然公園財団（向山）：自然公園財団としては、引き続き 7 時 50 分に開園する運用を継続させていただく。

環境省ウトロ（渡邊）：制度化については引き続き検討させていただきたい。安全管理を最優先とするならば、最初のレクチャー枠を 8 時 20 分に設定するという選択肢もあり得る。しかし、利用者満足度と安全管理の両立こそが計画の根幹であり、現場を熟知する引率者の方々の視点は不可欠である。来年度策定予定の中長期的な利用戦略の中で、安全対策も含めた議論を深めていきたい。

ガイド協議会（岩山）：日没の関係で安全対策上の大ループのレクチャー時間が短縮されたが、本来、既存の時間帯に対して適切な安全対策を講じることこそが必要である。なぜ対策を講じた上での運用を行わないのか疑問である。

環境省ウトロ（渡邊）：安全対策については万全を期している自負がある。朝の時間帯の課題については、現場での柔軟な運用によって解決可能であると考えており、もし現場対応だけでは限界が生じるというのであれば、その時点で改めて協議の場を設けたい。

ガイド協議会（岩山）：以前も指摘したが、8 時 10 分のレクチャー開始に対し 8 時開園では、トイレの案内など出発前の準備が物理的に間に合わず、現場は常に切迫している。この焦りが安全管理上のリスクを生んでいるという現場の声は届いているはずだ。場当たり的な対応ではなく、正式な制度として運用時間を定めてほしい。

自然公園財団（向山）：これまでの会議でも「口約束」で続けていくのかという議論があったが、会社組織として、また環境省との関係性においても、全てを制度化するには高いハードルがあるのが実情である。原則は 8 時開園であるが、渋滞対策やガイドツアーの円滑な出発のため、職員に負担を強いてでも 7 時 50 分に開けるという運用を数年間にわたり継続してきた。繁忙期の柔軟な対応も含め、管理者やフィールドハウスと密に連携してきたこれまでの実績と現場の努力を、まずはご理解いただきたい。

ガイド協議会（若月）：早朝の現場実態について、口頭の議論だけでは伝わりきらない部分

がある。現在、開館前のフィールドハウス前では、地上遊歩道の利用を熱望しながらも、レクチャーの定員制限や時間の制約により、入園を断念して帰宅せざるを得ない利用者が後を絶たない。前日の閉鎖等により利用を心待ちにしていた方々の期待を裏切る結果となっている。これは単なる主張ではなく、利用者の不利益を解消したいという思いからの提言である。環境省および各委員におかれては、ぜひ一度、早朝の現場状況を直接検証していただきたい。現場の現実を直視した上での、前向きな改善議論を強く望む。

環境省釧路（渡邊）：今いただいたご意見は、まさに現場で起きている真実なのだろうと受け止めている。私自身、世界遺産登録 20 周年のシンポジウムにおいて、この 20 年間に斜里町や羅臼町で人口が大幅に減少している現実に強い衝撃を受けた。この急激な人口減少の中で、いかにサービスを維持していくかは、この知床における喫緊の大きな課題である。また、ヒグマの事故が発生したことも極めて深刻な事態である。私自身、何度もヒグマに遭遇してきたが、人慣れしているように感じていたこともあり、襲ってくるとまでは想定していなかった。しかし、現実にあのような事故が起きた以上、認識を根底から改めなければならない。仮に知床五湖で同様の事故が起きれば、取り返しのつかない事態になる。管理者としては、五湖で決して事故を起こしてはならないという強い決意のもと、植生保護期を含め、このまま開園を継続して本当によいのかという議論を何度も重ねてきた。本省からも慎重な反応がある中で、地元の強い思いを汲み、安全対策を講じた上で開園に踏み切ったという経緯がある。安全対策を徹底することは大前提であるが、限られた管理リソースの中で、どこまでお客様のニーズに寄り添えるか。現実を見据えた擦り合わせの結果が、現在の「8 時開園」という判断につながっている。混雑の問題と安全確保をいかに両立させるか、最大限の配慮を尽くしながら、管理サイドも現場の皆様も共通の目的である「安全第一」を堅持できるよう、引き続きの協力をお願いしたい。

ウトロ地域協議会（渡邉）：本件の議論を深めるにあたり、詳細なデータの提示を求めたい。1 日あたりの駐車場稼働状況や、レクチャー枠を一つ削減した際の影響人数など、エビデンスに基づく具体的な数値が見えない現状では、前倒しによる混雑への影響を正確に判断することが難しい。また、利用者側の視点に立てば、ヒグマの出没傾向が変化し植生保護期でも遭遇するリスクが高まっている現状において、観光客が自由散策を行うことには強い危惧を抱いている。安全面のみならず、知床の真の価値を伝えるという観点からも、将来的に地上遊歩道は、ガイドが同行して利用することが一つの望ましい姿として定着していくことを期待したい。

環境省ウトロ（渡邊）：審査部会等で提示した詳細データがこの場で共有できておらず、申し訳ない。指摘の通り、客観的なエビデンスに基づいた判断は管理者として不可欠である。今後はデータの提示を含め、利用の方向性をしっかりと整理し、いただいた要望を

受け止めて対応していきたい。

環境省釧路（渡邊）：補足として、ヒグマ活動期における「小ループツアー」の増枠について報告する。本来は 5 月 10 日の活動期初日から開始したい意向であったが、事故後の増枠に対する慎重な意見もあり、安全確保のための最小限の検証枠として調整に時間を要した。パブリックコメント等の法的手続きを経てからの適用となるため、開始時期が当初予定より遅れる見込みであるが、安全第一を前提とした運用の確立に努めていきたい。

ガイド協議会（若月）：植生保護期の閉園時間の設定について確認したい。日没時間に合わせた前倒しを行う一方で、9 月の設定時間上は日没後も開園しているかのような差異が見受けられるが、これは利便性を考慮して余裕を持たせているという認識でよいか。

環境省ウトロ（渡邊）：閉園時間については公共バスの運行計画と密接に関わっており、即座に変更することが困難なため、今年度は現状維持と判断した。日没後の移動は安全管理上の課題があるため、来年度以降、バス事業者等と協議を重ね、実効性のある時間設定を検討していきたい。

知床財団（山本）：管理実務を担う現場の立場から、本質的な課題を共有したい。地域が「以前のような早朝開園」を望み、管理者（行政）がそれを決定するのであれば、我々は担い手として予算措置を含めた協議に応じ現場を運用する心づもりはしている。しかし、五湖の運用がどうあるべきか、という議論は、知床五湖という点での議論にとどまらず、国立公園全体の利用デザインをしながら俯瞰して検討すべき時期に来ているのではないか。例えば、羅臼岳の事故を受け、五湖に到着してからレクチャーを受けるのではなく、自然センター等の「入り口施設」で事前にヒグマ対策や公園利用のルールを深く理解してもらうような、手前での啓発が重要だと考えている。制度開始から 15 年が経過し、ヒグマの動態も社会情勢も大きく変化した。今回の羅臼岳事故を教訓に、公園全体の利用という広い視点の中で、五湖のあり方や適正な開園時間がどうあるべきか、改めて検討していただきたいと考えている。

環境省ウトロ（二神）：多岐にわたる議論をいただいた。2026 年度の知床五湖運用計画については、決議事項となっている。今出された議論を踏まえ、まずはこの内容で了承をいただきたい。本日出された多くの課題については、来年度の会議の場においてさらに議論を深めていくこととしたい。それでよろしいか。

一同：異議なし。

6)　知床五湖園地でのヒグマ等の安全管理対策について

資料 6-1　知床五湖園地でのヒグマの安全管理対策案一覧（説明/環境省）

環境省ウトロ（渡邊）：資料 6-1 は、来年度および中長期的なヒグマ安全管理対策をまとめ

たものである。来年度の対策を中心に紹介するが、利用のあり方と安全管理は一体不可分であり、中長期的な視点も重要であると考えている。来年度以降も継続して議論を深めたい。

資料 6-2　ツアーの中止・継続及び地上遊歩道の閉鎖・再開の基準等について（案）（説明/環境省）

環境省ウトロ（渡邊）：植生保護期とヒグマ活動期、それぞれの閉鎖基準を明確化し、利用者にも分かる形で明示したいと考えているが、これらは暫定的な基準であり、シーズン前研修等で詳細を詰め、ヒグマ活動ハンドブック等に明記することを検討している。

知床ガイド協議会（若月）：ヒグマ活動期の閉鎖判断基準について、同日同エリアでの連続遭遇に関する項目は従来も基準が存在していたが、今回はこれに新たな内容が追加されるのか確認したい。また「同時に複数頭の遭遇」という項目に関し、知床五湖では日常的に複数頭のヒグマが存在している実態がある。これを目撃したのみで即閉鎖とするのか、その運用方法についてはガイドの意見も聞きながら慎重に議論してほしい。

環境省ウトロ（渡邊）：承知した。引き続き検討課題とする。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：ヒグマの安全管理全般について意見を述べる。現在の対策は妥当だと思うが、知床全体でヒグマの人馴れが進んでおり、利用のあり方自体を見直す時期に来ているのではないか。例えば、知床五湖の周囲に電気柵を設置して、物理的にクマが入らないようにするなどの、一段上の対策を検討すべきではないか。高架木道から目の前にクマが見える状況は、ある種異常であり、人馴れを加速させている懸念もある。

環境省ウトロ（渡邊）：知床五湖の安全管理対策には人とヒグマという 2 つの管理側面がある。ヒグマ管理の面では、従来より「ヒグマの生息地に人がお邪魔する」というスタンスを維持しており、この基本姿勢は今後も変えるべきではないと考えている。そのため、五湖の周囲に電気柵を設置してヒグマを完全に排除するといった手法は、現在のスタンスからは検討しがたい。一方で、具体的な管理対策としては、知床五湖内でのヒグマの追い払いや捕獲を含めた管理のあり方について、これまで以上に検討の速度を上げて議論していく必要がある。また近年浮上している「人慣れ」という問題も、新たな観点として重要視している。この課題は知床五湖単体にとどまらず、知床地域全体のヒグマ管理にも通ずるものであるため、地域住民や関係者と緊密に協議を進めていく方針である。

知床財団（金川）：制度の開始当初は、レクチャーや情報提供、ルール作りといったソフト面を中心に安全対策を高め、利用機会を創出してきた。しばらくはその手法が機能していたが、ヒグマ側の変化や利用者側の状況変化を受け、安全対策上の懸念が生じている。

これに対し、事務局から安全対策を向上させるための多岐にわたる施策提案をいただいたことは、地域として歓迎すべきことである。一方で、ソフト面での対応と施設整備などハード面の対応は表裏一体である。つまり、安全対策のためのハード整備を進めすぎると、管理の手を入れ続けなければならず、結果として整備に歯止めが掛からなくなり、過剰対策に陥ってしまう恐れがある。また、コスト面や五湖のコンセプトとの整合性においても懸念が生じる。そのため、今後の安全対策のあり方や方向性については、時間をかけて慎重に議論すべきである。ヒグマへの対応のあり方についても、ヒグマの生息地に人間がお邪魔するという基本姿勢は変えるべきではないが、現在の利用者とヒグマとの距離感では安全性の担保が難しくなっている。事務局からは追い払いや捕獲も視野に入れた対応について言及があったように、今後のヒグマの対応についても議論を深める必要がある。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：ヒグマとの距離感は以前とは全く変わってしまっている。これまで長年「追い払い」を続けてきたが、その効果が限定的であることも判明している。だからといって、知床五湖をヒグマに明け渡すわけにもいかない。国立公園内の道路脇には、すでにシカ対策用の柵が設置されている。ヒグマについても同様に、特定箇所を利用するのであれば電気柵を設置するなどの対策を講じなければ、今の状況は収まらないのではないか。

知床ガイド協議会（岩山）：現在議論されている内容は、知床五湖に限ったものではなく、フレペの滝なども含めた知床国立公園全体における課題である。特に道路脇でヒグマを観察・撮影するために利用者が車を止め、人だかりができる問題や、電波の届かない場所でヒグマの出没状況などのトラブルを即座に共有できない現状がある。これらの問題に対し、国立公園の玄関口をどこに設定するかという動線管理や、利用者へのレクチャーのあり方とあわせて、知床全体の課題として包括的に検討していく必要がある。

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：圧倒的な利用者数を抱える知床五湖が、モデルケースとしての役割を果たすべきである。

環境省ウトロ（渡邊）：環境省としても強い危機感を持っている。抜本的な改革として、ヒグマ活動期の期間設定の見直しなど、より踏み込んだ議論を来年度以降に進めたい。

環境省釧路(渡邊):参考資料 4 に示された羅臼岳でのヒグマ人身事故再発防止案に基づき、知床五湖でも対策を講じる必要がある。今回の事故個体は岩尾別付近に頻繁に出没していた、人を恐れない人慣れした個体であった。こうした個体を増やさないための対策も不可欠であり、知床五湖を含む特定管理地において危険な行動をとるヒグマに対しては、捕獲等を含めた対応を強化していく。ヒグマ対策連絡会議の検討委員からは、知床五湖の利用実態そのものがヒグマの人慣れを助長しているのではないかとの指摘も出されている。ガイドが引率するツアーであっても、ヒグマに遭遇後も堂々とツアーを

継続しているといった意見もあり、何らかの対策を講じなければならない。具体的な基準については、資料 6－2 の 3 ページに参考として記載した通り、法に基づく規制行為の距離を１つの目安としたい。具体的には、ヒグマとの距離が 50 メートル未満でつきまとう行為を指導の対象とする。仮に 50 メートル未満の距離まで接近してしまった場合でも、速やかに回避行動をとれば、不適切な行為とはみなされない運用である。今後は地上遊歩道においても、この 50 メートルという距離基準を意識した運用が求められる。接近した際には、即座に現場から退避することを徹底していかなければならない。これまでは「事故を起こさないための距離」を重視してきたが、今後は「人慣れを助長しない行動」を利用者に求めていく。このようにヒグマとの距離感を根本的に見直し、基準を明確化して人慣れを防止する仕組みを構築することが、結果として知床全体の危険性を下げることにつながるのではないか。全体での取り組みが必要であるという指摘はその通りである。極端な案を挙げれば、知床全体を利用調整地区に指定し、全エリアでレクチャーを必須にするという議論も過去にはあった。しかし、実際にどこでレクチャーを行うのか、そして全体を滞りなく回せるのかといった現実的な課題が依然として残っている。かつて私自身も参加してシャトルバス運行を伴うアクセスコントロールを実施したが、関係機関の職員を総出で投入しても継続は非常に困難であると感じた。バス運賃を徴収しても採算が取れる状況ではなく、駐車場の確保やウトロ地区での運用調整など、一筋縄ではいかない問題が山積しているのが実情である。とはいえ、理想はそこにあると考えている。ガイドの引率によって自然を深く体感する方が、単に車で移動して短時間眺めるよりも、知床の本質を満喫できるはずである。この点は重要な課題として認識しており、エコツーリズム検討会議の中で引き続き皆さんと議論を深めていきたい。知床五湖は既に利用調整地区制度が導入されており、知床全体のモデルとなるべき地域であるので、「人慣れ」を助長してるのではないかと指摘されないように、管理の質を高めていきたいと考えている。ところで一点質問だが、かつて知床五湖でも電気柵を設置していたという記述を目にした記憶がある。当時、どのような目的でどのような運用をしていたのか、その経緯を教示いただきたい。

知床ガイド協議会（若月）：当時は 1 湖 2 湖を周遊できるよう、2 湖と 3 湖の間に限定して電気柵を設置していた。しかしヒグマが学習して柵を回り込んで侵入する事例が増え、十分な効果が得られなかった。侵入ルートを完全に封鎖したわけではなく、一部のルートを塞いでいただけだったことも要因である。また、メンテナンスの負担も大きかった。

知床ガイド協議会（岩山）：電気柵を設置することの懸念点として、ヒグマの逃げ道をふさいでしまい危険であるとの判断から撤去に至った経緯がある。

環境省釧路（渡邊）：五湖で事故を防ぐための策が電気柵なのか、あるいは別の手法なのか、改めて議論を深める必要がある。

ユートピア知床（吉田）：園地閉園の基準について質問したい。現在は悪天候が予想される場合に前日から閉園を決定することもあるが、実際に現地へ行くとそれほど天候が悪くない場合もある。逆に、ひどい天候なのに開園していることもあり、利用者から問い合わせを受けることがある。遊覧船などは「波の高さ何メートル以上で欠航」といった明確な基準があるが、知床五湖の高架木道や地上遊歩道においても、客観的かつ明確な判断基準を設けるべきではないか。

環境省ウトロ（渡邊）：園地の閉鎖基準については、過去にも議論の必要性が指摘されながら、十分な検討に至っていなかった。ご指摘の通り、客観的かつ明確な基準の策定が不可欠である。

知床財団（金川）：過去の事例から判断基準が設けられると考える。現場の管理を担う機関にとっても、明確な基準があることは助けになる。恣意的な判断を避け、管理の透明性を高めるためにも、機械的な基準も含めたガイドラインの策定は必要であると考えている。高架木道についても、現場の感覚として風速 15 メートル以上かつ南向きの風の場合には通行が困難になるといった目安はあるが、こういった指標や基準も明文化したほうが良いだろう。

資料 6-3　知床五湖地上遊歩道での環境整備について（説明/環境省）

環境省ウトロ（渡邊）：事故発生時の通報を正確に行うため、地点標識（標柱）を設置する。なお、標識の名称について小ループの「アルファ・ベータ・ガンマ」では分かりにくいとの意見があったため、来年度から「X・Y・Z」に変更することを検討しており、登録引率者にはシーズン前研修での共有を予定している。

資料 6-4　レクチャー映像の改修について（説明/環境省）

資料 6-5　登録引率者の研修カリキュラム改善について（説明/環境省）

資料 6-6　植生保護期（夏）の巡視の試行について（説明/環境省）

環境省ウトロ（二神）：ヒグマの安全対策については、今年度から継続して議論を進めていく。

7)　スイレンの除去計画について

資料 7　2026 年度 園芸スイレンの除去計画と今後の課題（説明/環境省）

知床財団（金川）：「除去活動のコンテンツ化」とは具体的にどのような内容か。ガイドツア

ーを受け入れて参加者に作業へ加わってもらうような形を想定しているのか。

環境省ウトロ（渡邊）：現時点では、カヌーを活用した除去体験ツアーや、企業研修・学校の学習プログラムの中に組み込むことを想定している。将来的な専門家育成や持続可能な仕組みづくりについては今年度の調査をふまえて検討していく。

知床財団（金川）：理解した。現在のスイレンの繁茂状況を考慮すると、観光コンテンツの開発や普及対策ではなく、除去作業に優先的にコストを投じるべき状況だと考える。

8) 利用適正化計画の改定について

資料８　利用適正化計画の改定について（説明/環境省）

環境省ウトロ（渡邊）：一日の上限人数については、当初 700 名とする案があったが、環境省内での議論の結果、ヒグマ対策の観点から慎重を期し、一旦は現状に近い 600 名に設定することとした。計画の改定には本来時間がかかるため余裕を持った数字にしていたが、3 年間の検証期間を経て柔軟に見直す方針であり、まずはこの 600 人で進めたいと考えている。利用ガイドラインについては、パブリックコメント等の手続きが必要になるため今回は現行のままとし、次回の改定時に反映させる予定である。

知床ガイド協議会（岩山）：上限人数を 700 人から 600 人に修正する件については理解した。これまで 5 年ごとなどであった改定のスパンをもう少し短くしていくという理解でよいか。

環境省ウトロ（渡邊）：確約はできないが、柔軟に考えていきたい。

環境省釧路（渡邊）：今回の改定は事故以前からの議論であったが、事故を受けて人慣れした個体の問題が浮き彫りになり、人慣れの抑制が必要であるという方向性が強まった。科学委員の先生方からも人数増には慎重な意見があり、利用ニーズに応えるための枠の拡大と管理面での懸念との間で議論があった。そのため、参考資料 3 の 3 カ年計画でしっかりと検証を行い、人数を増やしても管理が可能であると確認できた段階で、改めて見直しを行う流れを想定している。安全対策を徹底するためには、5 年というスパンにこだわらずに見直しのタイミングを早める必要があると考えており、今回はこの 600 人の枠内で試行事業を進めていただきたい。

環境省ウトロ（二神）：利用適正化計画の改定については今後「パブリックコメントの募集」を経て「告示」となる予定である。各詳細は、改めてお知らせする。

9) 立入認定手数料町民無料キャンペーンの実施について

資料９　立入認定手数料町民無料キャンペーンの実施について（説明/知床財団）

10) 知床五湖園地駐車場料金の改定について

資料 10　知床五湖園地駐車場料金改定について（説明/自然公園財団）

しれとこ・ウトロフォーラム 21（小川）：乗用車 700 円というのは一人で利用する場合などに高く感じられる懸念がある。1 時間の利用者もいれば 3 時間置く人もいる。500 円くらいであれば納得感があるが、700 円となると抵抗を感じる。

自然公園財団（向山）：ご指摘の点は理解している。乗用車だけ 200 円の上げ幅としているが、これは人件費高騰や諸経費を考えた比率として設定させていただいた。小川氏がおっしゃる時間制やダイナミックプライシング（繁忙期の価格変動）といった考え方も、将来的には検討していきたいと思っている。再来年度に電気が開通することもあり、自動ゲート化などの話も地域からいただいているが、まずは現行の有人管理体制を維持するための最低限の改定として理解をいただきたい。

知床ガイド協議会（若月）：この駐車場収益は、五湖の事業以外（カムイワッカ等）の予算配分にも入っているのか。

自然公園財団（向山）：カムイワッカ地区の管理業務は、環境省、北海道、および斜里町と協力して行っている。自然公園財団はこれら行政機関からの業務委託を受け、現地監視員を毎日 1 名以上配置するなど実務を担っており、直接的な現場運用経費については委託費によって充当されている。しかしながら、組織全体の管理運営コストについては、委託費のみで全てを網羅できるものではない。当財団の運営を支える最大の収益基盤は知床五湖の駐車場料金であり、他の管理事業も含めて運営を維持するためにご理解をいただきたい。

知床ガイド協議会（若月）：地域住民の理解は得られたとしても、一般の利用者が「知床五湖の駐車料金がカムイワッカ地区の管理費に充当される」という説明に対し、十分な納得感を得られるかについては懸念が残る。懸念すべきは、料金改定に伴う利用者の減少である。知床五湖の事業については、独立した事業体として完結させる視点を保持すべきではないか。本提案は料金引き上げ自体に反対するものではないが、価格に見合うサービスの提供が不可欠である。具体的には、開園直後の混雑緩和や入場プロセスの円滑化など、利用者が実感できるサービス向上を料金改定と同時に実施すべきである。利用者への説得力ある説明と、現場の混乱を回避するための運用改善を強く求める。

自然公園財団（向山）：社内でも議論し、オーバーツーリズムや渋滞対策にも寄与できればと考えている。朝一番の混雑状況の改善など、サービス向上の視点を持って取り組んでいきたい。料金改定後の具体的な運用についても、検討を継続するとともに、地域の皆様からの意見を伺いたい。まずは再来年度の駐車料金改定に向けて、来年度は周知広報を行う予定である。

環境省ウトロ（渡邊）：環境省としても、高架木道の維持管理等に多大なコストをかけてい

る。将来的には、駐車場料金だけでなく知床五湖園地全体の利用者負担のあり方を統合的に検討していく必要があると考えている。

環境省ウトロ（二神）：以上をもって、予定の議事を終了する。長時間にわたる活発な議論に感謝申し上げる。